



地域環境科学部

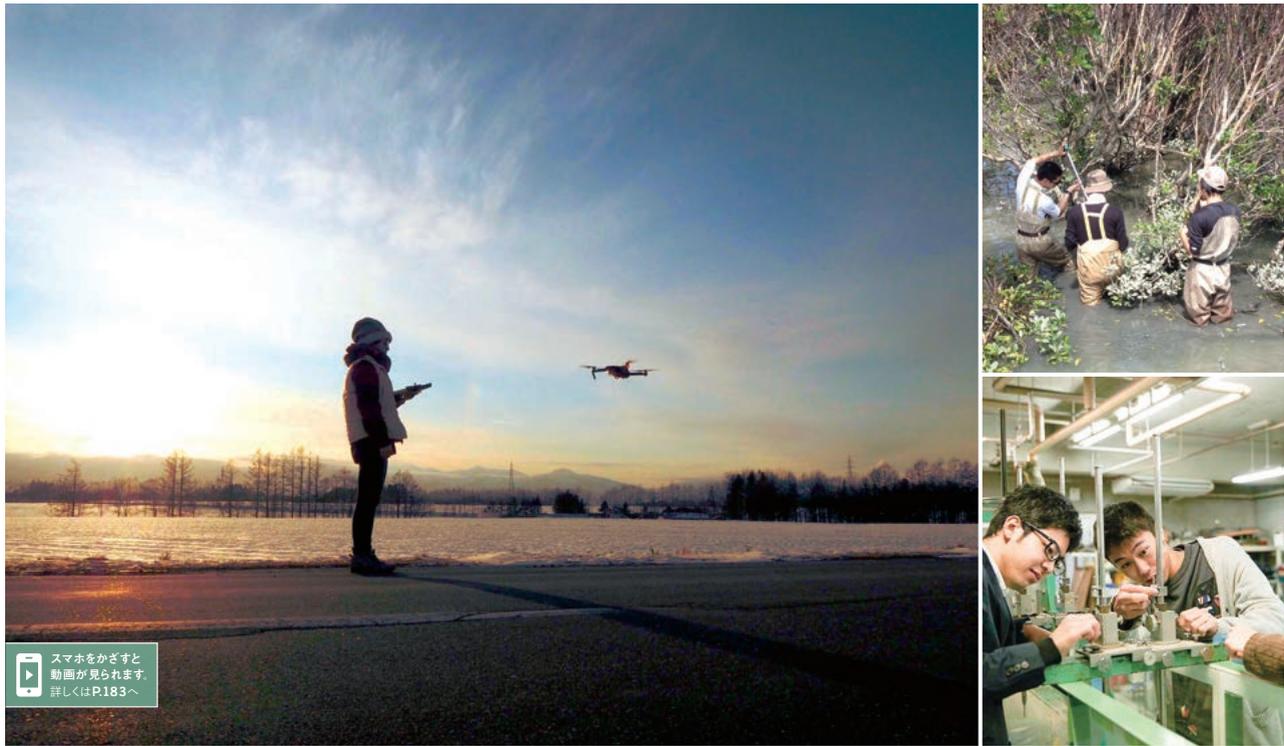
生産環境工学科

大学院農学研究科

農業工学専攻 / 博士前期課程・博士後期課程

Department of Bioproduction and Environment Engineering

食料生産・供給と環境保全を工学的視点から究め地域振興を目指す



UAV(ドローン)を使って地形・環境・作物生育の調査(冬の北海道:左写真)。沖縄マングローブ湿地での水文・生態調査(右上写真)、模型を使った水路実験(右下写真)等を行っています。

生産環境工学科の概要

生物生産を支援するエコ・テクノロジーの開発

長年培ってきた農業土木技術と農業機械技術を応用して、農業生産の現場の技術開発のみならず、地球温暖化や沙漠化、水資源の枯渇化や水質汚濁、生産技術とCO₂排出などの地球的規模の環境問題を解決するための技術を勉強する学科です。日本国内のみならず国外の乾燥地域、寒冷地域、モンスーン地域、熱帯地域においても、水、土壌、生物など地域資源の利用と保全、生物生産・環境保全のための情報技術の活用、自然と共生できる循環型社会の創造、ロボット農業といった生物生産と農産物の加工流通技術の高度化などについて研究しています。

JABEE 認定プログラム 本学科の技術者養成コースはJABEE 認定プログラムです。卒業時にはJABEE 認定プログラム修了生となり、国家資格の技術士一次試験が免除となります。また、科学技術に携わる【技術士補】の資格取得が可能となります。

最先端のエコ・テクノロジーを学ぶ

快適な環境を構築するために必要な工学や自然科学を通じ、論理・科学的に思考する力を養います。ビッグデータ解析などの情報技術やドローンなどに代表されるリモートセンシング技術を用いることで、研究対象は広がるばかり。現場に即して実践的に活用できる技術の習得には、東京農大ならではの実学主義が生き、そのフィールドは日本にとどまらず、アジア、アフリカを中心に世界に広がっています。

学科専門カリキュラム ■ 必修科目 ■ 選択科目

1年次	2年次	3年次	4年次		
数学 数学演習 基礎力学 基礎力学演習 材料力学 熱力学 応用数学 応用数学演習 生産環境工学概論 生産環境工学基礎演習 環境気象学 土と水の環境	測量学 測量実習 応用測量学 基礎実験 土質力学 土質力学演習 構造力学 構造力学演習 水理学 水理学演習	環境土壌物理学 地域環境保全学 鉄筋コンクリート工学 地形地質学 情報処理工学 土木材料学 機械力学 電気・電子工学 食品工学	作物栽培学 エネルギー工学 生産機械情報工学 地域資源利用工学 木材加工(製図及び実習を含む。) 金属加工(製図及び実習を含む。) 栽培(実習を含む。) 電気(実習を含む。) 専攻演習(一) 専攻実験 農地環境工学 農村計画学 農村環境工学 土地改良学 国土防災工学 環境物理学 流域水文学 地水環境工学 社会基盤工学	土木施工法 広域環境情報学 水利施設工学 環境土木学 計測・制御工学 農業・建設機械学 農産加工流通工学 設計製図 バイオロボティクス 生産環境工学特別演習 環境リモートセンシング工学 機械(実習を含む)	専攻演習(二) 専攻演習(三) 卒業論文 海外農業開発工学 資源管理制度論 河川工学





研究成果

<p>RESEARCH RESULT</p> <p>01</p>	<p>微生物による水質浄化と再生可能エネルギーの生産</p> <p>様々な多孔質体素材(竹炭等)を有用微生物の担体として開発して水質浄化能を評価するとともに、有用微生物による有機性廃棄物(果物の皮等)のメタン発酵を促進して再生可能エネルギーの生産に取り組んでいます。</p>	
<p>RESEARCH RESULT</p> <p>02</p>	<p>ジブチでの沙漠緑化前(左)と緑化後(右)</p> <p>世界で最も暑い国・ジブチ共和国で、28年以上にわたり沙漠緑化の研究を続けています。写真は緑化をする前とその4年後の場所を、同じ方向で撮影したものです。利用可能な地下水の特定や潜在緑地マップの作成、土壌の保水性の改善、節水灌漑技術の開発等の研究を通してジブチの持続的農業振興に貢献しています。</p>	
<p>RESEARCH RESULT</p> <p>03</p>	<p>千枚棚田の水質環境評価とUAVによる地形測量技術の精度向上</p> <p>茶園地では大量の窒素が使われるため、茶園からの流出水には高濃度の窒素を含みます。また水田における水移動を評価するには、高密度の地形データが必要になります。ここでは茶園地と水田が展開する静岡県菊川市千枚(せんがまち)棚田において、茶園地と水田の土地利用連鎖を活用した水質浄化能の機構解明と、水移動の解析に必要な高密度地形データ取得の精度向上についてUAV測量から検討しています。</p>	
<p>RESEARCH RESULT</p> <p>04</p>	<p>食品ロスを用いた昆虫生産システムの開発</p> <p>コンピュータビジョンと機械学習で昆虫の自動認識に成功しました。これにより食品ロスを餌にした学習型昆虫工場を開発し、さらに大量生産したタンパク質パウダーを食品3Dプリンターで全く新しい食品にすることにより、食料・環境・エネルギー問題解決を目指します。</p>	

授業PICK UP

材料力学 1年次必修

1年次後期に開講するこの授業では、農業土木や農業機械を学ぶ上で必要となる材料の力学的な性質について学ぶ。材料の力学的性質を知ること、ものづくりにおいては、不可欠である。パソコンやスマートフォン用に開発した構造解析アプリケーションを活用した授業では、目に見えない現象を数値解析によりデジタル化し、その結果を視覚化することで、物理現象を正しく理解する能力を養う。



測量実習 2年次必修

2年次前期のこの実習は、同じく前期開講の「測量学」と関連しており、理論を実践にリンクさせながら授業を進める。トランバース測量、平板測量、水準測量を中心とした測量技術の習得を目指して、屋外で実際に測量を行い、方向角や座標の計算、製図にも取り組む。また測量機器のひとつであるトータルステーションやGNSS(全球衛星測位システム)を利用した測量技術も学ぶ。



基礎実験 2年次必修

2年次前期に選択する専攻分野で必要とされる実験技術の基礎を習得する。地域資源利用分野では水と土の基本的性質とその測定技術、環境情報利用分野ではプログラミングの基礎と土壌や大気の大気量の収集・解析法、環境基盤創成分野では土木材料を用いた物理実験と模型水路を活用した水理実験、機械システム創成分野では耕うん機の構造とロボティクスおよび農産物の加工・品質評価技術についてそれぞれ習得する。



大学院カリキュラム 農業工学専攻

博士前期課程

地域資源利用学特論I*
地域資源利用学特論II*
地域資源利用学特論演習*
生産環境情報・計画学特論I*
生産環境情報・計画学特論II*
生産環境情報・計画学特論演習*

施設工学特論I
施設工学特論II
施設工学特論演習*
農業生産システム工学特論I*
農業生産システム工学特論II*
農業生産システム工学特論演習*

水利施設管理学特論*
海外農業開発学特論*
土壌物理学特論*
農村計画学特論*
農地環境学特論*
土木材料学特論*

土木施工法特論*
農業ロボット工学特論*
農産プロセス工学特論*
広域環境情報学特論*

フィールド調査*
農業工学専修実験*
論文作成法*
プレゼンテーション法*
農業工学特別演習*

博士後期課程

農業工学特別研究*

*一部を英語で実施



WEBサイトにて学科の詳細情報を掲載しています。





生産環境工学科の研究分野

地域資源利用分野

keywords

土壌・水環境保全
バイオマス
農村資源有効利用



研究ピックアップ

発電と同時に環境浄化を期待できる微生物利用技術の開発
微生物を利用して汚泥からの電力回収と汚泥中の有機物分解を同時に可能とした技術(微生物燃料電池)を新たに開発し、白色LEDの連続点灯に成功しました。鉄鋼スラグや竹炭等の利用と微生物の種類の変更による発電性能の向上とコスト削減に取り組んでいます。

環境情報利用分野

keywords

気候変動
沙漠緑化
リモートセンシング



研究ピックアップ

ドローンによる茶葉やオリーブ葉の生育状況把握
近赤外線感知可能なカメラを搭載したUAV(ドローン)を用い、植物の成長量や繁茂状況を面的に生育を追って観測しています。静岡県産の菊川の一番茶・二番茶の最適摘採時期の予測や、天竜のオリーブ樹葉の収量や品質の予測に向けた観測技術を開発しています。撮影画像からの茶葉アミノ酸含有量の予測可能性を示しました。

エコ・テクノロジー

環境基盤創成分野

keywords

水環境評価
エコマテリアル
ストックマネジメント



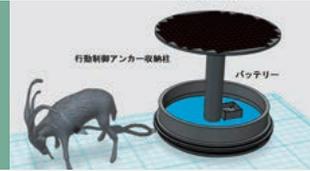
研究ピックアップ

災害時の交通確保を可能とするコンクリート舗装
コンクリート舗装は30年以上通行することが出来ます。また地震などの災害時にも、損傷が少なく通行可能です。このような特性を生かしたコンクリート舗装を今よりも合理的に設計する、経済的に施工する、適切に管理するための研究を行っています。

機械システム創成分野

keywords

バイオロボティクス
太陽電池
自動走行



研究ピックアップ

GNSSを用いた草食動物の位置制御システムの開発
農業に用いるロボットは、作物と共に環境に放される。図は提案している除草用ロボットシステム。草食動物を取り入れたこのシステムには、刈り取り・移動のための動力はいらない。GNSS(人工衛星を用いたナビゲーションシステム)による位置計測とアンカーの打ち込み・引き抜きを太陽電池駆動で行う。

“実学主義”



農業・農村の課題を、1つでも多く解決していきたいです。

生産環境工学科 2019年3月卒/小泉綾香さん(神奈川県立横浜平沼高等学校出身)

高校時代は数学と幕末の歴史に夢中でした。数学を使って勉強がしたくて理系の大学を調べたところ、東京農大の創設者が私の尊敬する榎本武揚であることを知りました。オープンキャンパスに参加して、生産環境工学科では物理と数学を中心に学べることや、農業が河川水質を汚していることを知りました。そこで、入学後は農業農村工学を専攻し、農業・農村を取り囲む環境の変化に配慮した農業生産技術に関する研究の必要性や奥深さ、面白さに気づきました。現在は農林水産省で技術職として勤務しています。大学での学びを活かし、農業生産に不可欠な水路の老朽化対策や、環境にも配慮しつつ高品質かつ高付加価値の作物を生産するための灌漑施設の整備等に携わり、日本の農業・農村の持続的な発展に貢献したいです。

卒業生の進路状況 (過去2年間)

専門技術を活かし、地球環境改善・地域活性に貢献

卒業生は公務員、中高教員、コンサルタント、建設、機械、情報、食品関連会社など多岐の分野で数世代(78年の歴史)にわたって活躍しています。特に2012年以降では卒業生の公務員採用者が連続20%越え(6年平均: 36.8人)で、平成29年度卒業生は47人が公務員として採用されました。右リスト以外の政令指定都市や都道府県でも多くの卒業生が専門技術者等として活躍しています。

主な就職先

公務員	サービス業 コンサルタンツ	サービス業 情報・通信	建設	メーカー その他
農林水産省 国土交通省 東京都庁 長野県庁 埼玉県庁 茨城県庁 千葉県庁 さいたま市役所 横浜市役所 品川区役所	東京水道サービス 上伊那広域水道用企水会 日本工営 フジヤマ NTCコンサルタンツ 内外エンジニアリング キタイ設計 ネクスコ東日本エンジニアリング 東日本高速道路 基礎地盤コンサルタンツ	NTTコムエンジニアリング NTTデータビジネスシステムズ NECソリューションイノベータ キャノンシステムアンドサポート ソフトバンク 日本サムソン 富士ソフト 第一情報システムズ 富士フィルムロジスティクス 富士電機ITセンター	鴻池組 京王建設 金杉建設 佐田建設 三機工業 NIPPO 鉄建建設 日特建設 安藤・間 前田道路	井関農機 サタケ カワサキ機工 ヤンマー フソウ 三菱マヒンドラ農機 日本ギア工業 木村農産商事 やまびこ 丸山製作所





研究室一覧 (2019年4月1日現在) *大学院指導教授・准教授

地域資源利用工学研究室

地域資源利用分野

三原真智人 教授* / 中島 亨 准教授

地域を見つめ水・土の環境を科学する

土地資源、水資源、生物資源を地域資源として捉え、有用な生物資源の利活用を通して土地資源や水資源の持続的利用を進めつつ農村開発や地域環境の修復保全にアプローチしている。具体的には、農地および農業用水の持続的利用、土壌・水環境の修復保全のための工学的・生物学的対策の検討、国際開発協力における住民参加手法の検討等について研究活動を展開している。



社会基盤工学研究室

環境基盤創成分野

小梁川雅 教授* / 川名 太 教授* / 杉本隆之 助教

人と自然にやさしい環境保全技術を科学する

当研究室では、農村における生物生産性の向上と生態系の保全、都市における人や自然にやさしい環境の創造を目的とし、材料や構造の視点から社会インフラの設計・建設・維持に係わる技術的な課題にアプローチしている。『循環型社会の構築』、「安全で安心な社会の実現」、「効率的なインフラ整備」をテーマに、資源のリサイクル技術や新材料の開発、構造物の設計法や機能診断技術の構築など、産官学が一体となった研究テーマを多数扱っている。



農村環境工学研究室

地域資源利用分野

中村貴彦 准教授* / トウ・ナロン 助教

環境科学的に農村の未来をきりひらく

食料生産機能だけでなく防災や自然環境保全等の多面的機能(生態系サービス)を有している日本の農業農村は危機的状況にあると言われている。本研究室は生産基盤となる農地の利用と保全、多面的機能の良好な発揮等を農村環境工学的な視点から考え、農業農村の振興を目指す。具体的には、生産性の高い農地土壌環境保全、農地を利用した排水・有機性廃棄物の処理、農業用水の効率的な利用、水質保全、地域資源・有機性廃棄物の利活用と農村における再生可能エネルギー生産に関する研究を行っている。



水利施設工学研究室

環境基盤創成分野

岡澤 宏 教授* / 山崎由理 助教

水資源に関わる環境保全システムの構築

当研究室では、水路などの水利施設の設計などに加えて、未利用資源を活用した農業汚濁水の水質浄化、水文モデルによる降雨流出時を対象とした農業流域河川の流量・水質変動予測といった農業と水質源に関わる教育・研究に取り組んでいる。具体的には、農業排水の水質改善を目指した石灰の再利用法、数値モデルによる農業流域河川の洪水予測、水路における騒音問題の改善に向けた水利施設の設計法など、フィールド調査や室内実験を通じて行っている。これらの研究活動を通じて、環境に配慮した基盤施設の計画・設計・持続管理に携わる技術者を育成している。



広域環境情報学研究室

環境情報利用分野

島田沢彦 教授* / 関山絢子 准教授

広域情報を駆使した地域環境の評価

広域環境情報を駆使した自然環境・生産環境の観測・分析・評価を通して、地域の持続的発展に資する情報を提供するための研究を行っている。植生・土壌・水域・生物・人工被覆の情報を広域にモニタリングするため、電子地図・気象観測データや衛星・ドローン画像を駆使し、解析ツールとして地理情報システム(GIS)を用いる。研究対象は国内の水田・茶畑・マングローブ林等の他、海外ではモンゴル草地・ジブチ乾燥地・インドネシア熱帯泥炭地において植生・土壌・水循環環境の改善に向けたモニタリングを行っている。



バイオリボティクス研究室

機械システム創成分野

田島 淳 教授* / 佐々木豊 教授*

ロボティクスで生物・環境分野の未来を拓く

電動式農業システムおよび農用運搬システムの開発を行っている。具体的には、ロボット農業に適した耕うん・栽培方法の研究、圃場状態の耕うん同時センシングシステムの開発、中山間地域向け農作業システムの提案などである。また、バイオリボティクス・農業情報工学・感性工学・教育工学をキーワードに、知農ロボットの開発、コンピュータビジョンを用いた感性抽出システムの開発、ICT支援による野生鳥獣対策などを行っている。これらの研究活動を通して、問題解決能力を持った人材育成を目指している。



地水環境工学研究室

環境情報利用分野

渡邊文雄 教授* / 鈴木伸治 教授*

沙漠緑化技術の開発 ― 緑の沙漠を夢みて ―

雨をはじめとする水の循環と、太陽に起因するエネルギーの流れは、光合成の要である。当研究室では、この水やエネルギーが与える様々な作用やメカニズムについて学び、栽培環境である水田や畑の水管理や土壌管理に関する研究を行っている。またこれらの知識や技術を、気候変動の影響評価や適応技術の確立、さらには沙漠の緑化などに役立てようとしている。このように当研究室は、気象や土壌などの環境情報を測定し、植物の生体情報との関係を観測によって明らかにすることで、自然環境の保全や改善のための研究を行っている。



農産加工流通工学研究室

機械システム創成分野

坂口栄一郎 教授* / 村松良樹 教授* / 川上昭太郎 准教授

農産物の有効利用を目指し加工流通技術を開発

農産物は生態系が育んだ貴重な資源である。その農産物も含んだ食品を有効に利用し、品質を高め、安全な状態で消費者に届けるための物理的な加工および流通技術を研究している。具体的には、数値シミュレーションによる粒状体食品用加工機械の合理的設計法の開発、非破壊評価技術および農産物・食品加工流通機械の制御システムの開発、数値シミュレーションに必要となる物理パラメータの測定・推定、農産物の最適加工流通条件の確立などである。これらの研究活動を通して、食品機械技術者としての基本的素養と問題解決能力を身につけた人材育成を目指している。



“人物を畑に環す”



コンサルタントとして途上国の農業農村開発に携わっています。

NTCインターナショナル株式会社 技術開発部 主任技師
小林維円さん / 大学院農学研究科 農業工学専攻 博士前期課程 2010年修了

開発コンサルタントとして、外務省、国際協力機構(JICA)から受注した開発途上国の農業農村開発事業に携わっています。地域開発のための調査・計画立案や、灌漑施設や農村インフラの設計・施工監理、日本企業進出のお手伝いなどを手がけ、1年に合計6~7ヶ月ほど途上国に滞在します。業務は大学の専門分野に直結しており、大学で学んだ知識や技術を活かして、途上国の発展に貢献できます。私は地水環境工学研究室でいろいろな国の留学生や研修生と交流を持ったことと、4年次のエチオピアでの青年海外協力隊の短期ボランティア活動をきっかけに今の仕事を志しました。この学科で勉強できる農業工学や農業土木は、まだまだ世界で求められる技術です。世界の人々のためになる仕事をしたい人にはおすすめします。



沙漠に農牧業をつくれ。



2018年12月末～2019年1月の調査にて。今回は篤農家(とくのうか)農園の地下水汲み上げ動力に使われるソーラーパネルの発電効率を調査。大学院生の修士論文研究も兼ねている。①ソーラーパネルを確認する大学院生 ②各種計測器の設置作業を終え農園の方と休憩 ③近赤外線カメラ付ドローンで農園全体像と作物育成状況を把握 ④ジブチのグランドキャニオンBelvedere sul canyonにて ⑤標高-150mのアッサル湖で析出した塩を手取る藻類研究の渡辺教授 ⑥大バラ砂漠で記念撮影。向かって右から島田教授、大学院生、渡辺教授

2018年12月末～2019年1月の調査にて。今回は篤農家(とくのうか)農園の地下水汲み上げ動力に使われるソーラーパネルの発電効率を調査。私(篠崎誠)の大学院・修士論文研究も兼ねての調査でした。ソーラーパネルを確認する私 各種計測器の設置作業を終え農園の方と休憩 近赤外線カメラ付ドローンで農園全体像と作物育成状況を把握 ジブチのグランドキャニオンBelvedere sul canyonにて 標高「-150m」のアッサル湖で析出した塩を手取る藻類研究者の渡辺准教授 大バラ砂漠で記念撮影。向かって右から私の指導教授・島田先生、私、渡辺先生

不可能と言われていた

乾燥地に農牧業を実現する研究。

島田 沢彦 教授

地域環境科学部 生産環境工学科

希少な雨が海へ流れてしまう

東アフリカのジブチ共和国は非常に過酷な気象環境で農作は不可能と言われていました。年間降雨量は日本の約1/10の150mm。国のほとんどが乾燥地で、雨が降っても浸透せず、すべて海へ流れ出てしまいます。東京農大はジブチ共和国からの要請で、約25年まえから乾燥地で農牧業(アグロパストラル)を実現する研究に挑んできました。目標はジブチで暮らす人たちがこの地でより豊かな生活を實現すること。沙漠緑化だけにとどまることなく、付加価値の高い農作物が収穫できて、収入を得ることができたり、足りなかった栄養素が摂取できたり。また、ジブチの人たちが自らの手で農牧業を持続発展できるような技術や仕組みを、東京農大の全学部あらゆる知見とノウハウを注いで提供してきました。

実現に向けて

2018年、本研究はSATREPS(右記参照)の採択で大きな山場を迎えました。島田沢彦教授(地域環境科学部 生産環境工学科)をリーダーに、乾燥地に最適な農牧業(アグロパストラル)をいよいよ確立させます。これまでの研究成果に加えて、今回、ジブチ全域の地下水脈を明らかにし、水の活用管理方法の確立や、農地を選定して実験農場を開発。また、都市から出るゴミや家畜の糞を利用して



実装するアグロパストラルのイメージ図



ジブチの新聞にも取り上げられたプロジェクトの調印式

植物栽培ができるような、人にとって家畜にとっても有用な循環型森林農業(アグロフォレストリー)を開発します。このモデルが確立されれば、同じ環境の近隣諸国へ展開することも十分可能です。最終目標は、ジブチの人たちが自らの手で、生活をより豊かにすること。このように東京農大の研究はこれまで考えられなかったことを実現可能にし、世界の人々の幸せをつくらせているのです。

本研究の概要はWEBで <https://www.nodai.ac.jp/news/article/satreps/>

ジブチ共和国の本研究は

平成30年「地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)」に、私立大学として唯一採択されました。

地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS: Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development)は、科学技術と外交を連携し、相互に発展させる「科学技術外交」の強化の一環として、文部科学省、外務省の支援のもと、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)並びに国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED)及び独立行政法人国際協力機構(JICA)が共同で実施しているプログラムです。これまで私立大学が代表機関の採択課題は7課題(創価大学、慶應義塾大学、東海大学、中部大学、近畿大学(2回)、立命館大学)、東京農業大学は8課題目となります。平成30年度は申請した99機関中、7機関が採択され、東京農業大学は私立大学として唯一の採択となりました。採択された島田沢彦教授の研究は「ジブチにおける広域緑化ポテンシャル評価に基づいた発展的・持続可能水資源管理技術確立に関する研究」となります。研究期間は5年です。

東京農大の研究は

SDGs(持続可能な開発目標)に貢献しています。

SDGs(エスディーゼイズ)とは、国連加盟193か国が2016年～2030年の15年間で達成するために掲げた目標で、2015年9月の国連サミットで採択されました。下記の17の目標と、それらを達成するための具体的な169のターゲットで構成されています。ジブチの研究は、ジブチ国の持続可能な農業の促進と食糧安全保障を實現することで、SDGs目標2「飢餓をゼロ」へ貢献。さらに、地下水脈を明らかにすることで、農牧用水と生活水の持続可能な管理の確保ができ、SDGs目標6「安全な水とトイレを世界中に」に貢献しています。これを一例として、SDGsが掲げる目標に貢献する研究活動が、東京農大にはたくさんあります。さあ、皆さんも世界に貢献する研究に参加しませんか。



GLOBAL TOPIC

東京農大は海外での研究・調査が多いという事実。

東京農大では、世界をターゲットにした研究・調査や学会発表などが盛んに行われています。

渡航者数合計のべ488人 (2017年10月～2018年9月)

	国数	人数	渡航目的
学部生	10	40	短期・長期留学、先生に調査同行
大学院生	37	145	研究・調査、学会発表
教職員	54	303	研究・調査、現地で指導、学生の引率、学会発表
合計		488	

国際交流プログラムによる渡航者数は22,23Pを参照

渡航先国62カ国 (2017年10月～2018年9月)

アイルランド/アフガニスタン/アメリカ/アルゼンチン/イギリス/イスラエル/イタリア/インド/インドネシア/ウガンダ/エクアドル/エストニア/エチオピア/オーストラリア/オランダ/カナダ/カンボジア/ギリシャ/ケニア/サウジアラビア/ジブチ共和国/シンガポール/スイス/スウェーデン/スペイン/スリランカ/スロベニア/セネガル/タイ/タンザニア/デンマーク/ドイツ/トルコ/トンガ王国/ナイジェリア/ニュージーランド/ネパール/ノルウェー/バミューダ諸島/バングラデシュ/フィリピン/フィンランド/ブラジル/フランス/ブルガリア/ベトナム/ベルギー/ボスニア・ヘルツェゴビナ国/マレーシア/ミャンマー/モンゴル/ヨルダン/ラオス/ルーマニア/ルワンダ/ロシア/韓国/香港/台湾/中国/南アフリカ

東京農業大学 大学院生海外研究発表支援プログラム

大学院生は国際学会発表でかかる経費の一部を大学から補助する制度「東京農業大学大学院生海外研究発表支援プログラム」もあります。2018年度では49人の大学院生が採択されました。